

島根県内に所在する木彫仏像・神像の樹種調査（２）

—附・放射性炭素による年代測定結果—

濱田 恒志・田鶴 寿弥子・杉山 淳司

はじめに

本稿は、本誌第31号掲載の「島根県内に所在する木彫仏像・神像の樹種調査」（以下、「前稿」）の続編である。前稿では仏像を中心に樹種識別結果の報告を行ったが、本稿では神像を中心に報告を行い、その傾向について考察を加えたい。調査方法ならびに識別根拠については前稿にて明示した通りである。また、一部の像については樹種識別に用いた試料を利用して放射性炭素による年代測定も行ったので、その結果についてもあわせて報告したい。各作例の尊名は後掲参考文献に準ずる。前稿同様、文責は各箇所の末尾に苗字を記してある。（濱田）

前稿に記した識別の根拠に加えて、今回の調査で新出した２種のそれを以下に示す。

アスナロ属：垂直・水平樹脂道のいずれをも欠く針葉樹材であり、早材から晩材への移行は緩やか。晩材の幅がやや広い。分野壁孔は小型のトウヒ型～ヒノキ型で１分野に２－３個が散在する。本稿では、ヒノキあるいはアスナロ属というような同定結果を示したものがあるが、これは木片の劣化や小ささにより、解剖学的特徴をもってしてもヒノキかアスナロ属かを特定することが現段階では困難なケースがあり、そのような記載にとどめたものである。

カツラ：角ばった孤立道管が散在する散孔材。道管は階段穿孔を有し、段数がきわめて多い。道管側壁に階段壁孔がみられる。道管放射組織間壁孔は対列状ないしは階段状となる。放射組織は上下の１～３列が直列細胞となる異性であり、おおよそ２細胞幅を示す。

その他、識別結果に関する個別の留意事項については、各作例に応じて以下に示している。（田鶴・杉山）

１、樹種識別結果

（１）奥出雲町・伊賀多氣神社

- ・隨身立像（その１） ヒノキ（図１）
- ・隨身立像（その２） ヒノキ（図２）

伊賀多氣神社は奥出雲町横田に所在。本像は同社に伝来した２尊１組の隨身立像。一木造りで、両像とも現状の全容を一材から彫成し、内割りせず、木芯は像内に籠める。現状の表面は全体に素地を呈するが、一部に彩色の痕が認められ、当初は彩色像だったとみられる。従来、制作年代は平安後期頃と考えられてきたが、本像の用材については年代測定も行ったので後述する。立像の隨身像は島根では珍しいが、岡山・広島・愛媛・香川など瀬戸内地方に著名な例がある。（濱田）

（２）出雲市・鰐淵寺

神像群（県指定文化財）

- ・牛頭天王坐像（その１） ヒノキあるいはアスナロ属（図３）

- ・僧形神坐像 カヤ (図4)
- ・女神坐像 カヤ (図5)
- ・僧形神立像 モクレン属 (図6)
- ・女神立像 モクレン属 (図7)
- ・男神坐像 (その1) ヒノキあるいはアスナロ属 (図8)
- ・男神坐像 (その2) カヤ (図9)
- ・男神坐像 (その3) カヤ (図10)
- ・男神立像 (その1) カヤ (図11)
- ・男神立像 (その2) カヤ (図12)
- ・女神坐像 カヤ (図13)

神像群 (文化財未指定)

- ・男神坐像 カヤ (図14)
- ・僧形神坐像 カヤ (図15)
- ・天部形立像 モクレン属 (図16)

当地の天台の古刹として知られる鰐淵寺には、平安後期から鎌倉期の作とみられる数多くの神像彫刻も伝わる。多くは境内の山王七仏堂から発見されたというのが、像高や作風が多様であるため、複数の堂宇に祀られていた像が徐々に一箇所に纏められたものとみられている。同寺の神像群のうち代表的な13軀が県指定文化財に指定されていることに加え、未指定文化財の中にも県指定と類似した様式を示す像がある。今回はそれらの像を調査対象としたが、保存状態上の理由で全軀の調査は難しく (木片を採取し得ない・プレパラートを作成し得ない、など)、県指定分については11軀、未指定分は3軀の結果を得た。

以下各像の概要を記す。まず県指定の像について。

牛頭天王坐像 (その1・図3) は同寺に2軀ある牛頭天王像のうち大きい1軀。僧形神坐像・女神坐像 (図4・5) は作風が近く、おそらく一具の作。僧形神立像・女神立像 (図6・7) も同様だが、後掲の男神立像 (その1・図11) や天部形立像 (図16) もこれらと類似した作風を示す。

男神坐像 (その1・図8) は頭頂部や面部が特徴的な異形の像。同 (その2・図9) は、大ぶりの頭部と、その頭部正面の目立つ箇所に大きな節を配する特徴が後掲僧形神坐像 (図15) と類似し、同じ作者とみてよい。男神坐像 (その3・図10) は鰐淵寺の神像群の中でもひととき彫技が簡素であり、制作年代を判断しがたい作。

男神立像 (その1・図11) と同 (その2・図12) は、作風が異なるものの、両手で棒を地面に突き刺して立つという特異な姿勢が共通し、出雲の国引き神話における素戔鳴尊ないし八束水臣津野命を表現した像という説がある。女神坐像 (図13) も秀作だが、現在までの調査では、同寺神像群の中から一具となるような像は見出せていない。

次に未指定の像について。男神坐像 (図14) は県指定の男神坐像 (その4・今回未調査) と同一の作風を示す。僧形神坐像 (図15) は先述のとおり県指定の男神坐像 (その2・図9) と同一の作風。天部形立像 (図16) は仁王や不動明王のように瞋目し、特異な髪型を有する異形像で、先述のとおり僧形神立像・女神立像 (図6・7) および男神立像 (その1・図11) と作風が近似する。(濱田)

2作例については、「はじめに」にて記載したとおり、ヒノキかアスナロ属かの特定が難しいと判断し、ヒノキあるいはアスナロ属との記載にとどめている。(田鶴・杉山)

(3) 益田市・櫛代賀姫神社

- ・僧形神坐像 ヒノキ (図17)

・男神坐像（その2） ヒノキ（図18）

櫛代賀姫神社は益田川河口近くの小高い山上に鎮座。江戸期以前の歴史については不明な点が多いものの、近隣には大規模な古墳群や港湾集落などの遺跡が点在し、古代から中世にかけて人々の営みが活発な地域であったことが知られる。

僧形神坐像は従来、旧島根県立博物館および古代出雲歴史博物館に寄託されていた像で、現在、益田市指定文化財。近年の調査で、元は益田市に所在した勝達寺に伝わり、明治期の廃仏毀釈の際に同社に移坐された可能性のあることが判明した。一方、男神坐像（その2）は、男神坐像（その1）・女神坐像と共に、元来同社に祀られてきた像。以上4軀のうち、木片が採取可能であった2軀について調査を実施した。

元来同社に伝わった男神坐像（その1）・同（その2）・女神坐像は作風が酷似しており、同一の作者である。一方、僧形神坐像は上記のとおり原所在地が異なるものの、作風は酷似しており、同像の作者も他3像と同一とみてよい。櫛代賀姫神社と勝達寺はいずれも益田川の流域に所在するため、同一の文化圏にあったのであろう。4像とも一木造り・内割りなし。11～12世紀の作とみられる。木片の採取できなかった男神坐像（その1）と女神坐像も、目視によれば木肌の様相は今回調査の2像と酷似している。その他同社神像の詳細については、後掲参考文献の濱田・中司「益田市・櫛代賀姫神社の神像について」を参照されたい。男神坐像（その2）の写真も同文献を参照。（濱田）

（4）出雲文化伝承館

神像群

- ・その1 男神坐像 カヤ（図19）
- ・その3 男神坐像 ヒノキ（図20）
- ・その77 男神坐像 カヤ（図21）
- ・その139 男神坐像 カツラ（図22）

出雲市・日御碕神社宮司家の邸内社から発見された神像群で、現在は出雲文化伝承館の所蔵。総数は少なくとも171軀に及ぶ。諸像の様式や年代は一定せず、恐らくは明治期に行われた神社の統廃合などを原因として、地域の各所に祀られていた像が有力社である同社へ集められたものとみられる。諸像のうち注目すべき作例9軀を選んで濱田が木片を採取したが、前稿で示したとおり「健全な箇所からの採取は行わず、損傷箇所から既に脱落し復帰不能な木片のみを採取する」という制約を課しておこなったゆえ木片の状態に問題のあるものが多く、今回結果を得ることができたのは4軀であった。その1とその77は同一の作風を示し、平安時代に遡るとみられる像。その3も平安時代の作かとみられる。その139は中世後期から近世の作とみられるが、像高は約50cmに及び、同神像群の中では大型の像。（濱田）

2、樹種識別結果の考察

今回調査の同定結果一覧は後掲の表1に、集計は表2に示している。

今回調査対象とした22軀は、中世後期から近世の作とみられる1軀（図22）を除けば、いずれも平安後期から鎌倉時代の期間に制作されたとみられる像である。この21軀についてみると、カヤが11軀、ヒノキ（あるいはアスナロ属）とされたのが7軀であり、調査対象の大半を占める。前稿でも言及したように、カヤとヒノキは木彫仏像のもっとも主要な材種でもある。もとより限られた範囲の調査対象ではあるものの、今回の結果では、平安期の仏像と神像の間で樹種選択について有意差はほとんど見られないといえよう⁽¹⁾。

先行研究によれば、木彫仏像の樹種選択の大きな傾向としては、平安前期以来の一木彫像ではカヤが主要とみ

られ、平安後期以降の木彫像（割矧ぎ造りや寄木造りも含む）ではヒノキが多くなっていく傾向が指摘されている⁽²⁾。前稿では島根県内の傾向もこれに準ずることを指摘するとともに、一木彫の小像では平安後期も依然としてカヤが選択され、規模の大きい造像などではヒノキが選択されたとみられることも併せて指摘した。

この傾向は、神像についても同様のようである。すなわち、一木彫の小像（図10・14ほか）や、正面の目立つところに節を配するなどして用材に何らかの宗教的意味を込めたとみられる像（図4・5・9・15）にはカヤが選択され、法量の大きな像（図1・2・17・18）や、適宜別材を寄せて構成される像（図3・8）にはヒノキあるいはアスナロ属が選択されている。目立つところに節を配する作例については霊木信仰が想定されがちであるが⁽³⁾、節の有る無しに拘わらずカヤが選択されていることをみれば、そうした霊木信仰が仮にあったとしても、そのことと樹種選択とは必ずしも連関したわけではなかったようである。

またこのたびの調査では、カヤとヒノキの他にモクレン属とされる例が3軀見出された（図6・7・16）。この3軀はいずれも像高40cm程度の立像で、作風も近い。モクレン属の作例はこのたびの調査で仏像でも見出されている（雲南市・禅定寺の天部立像その2。前稿図7）が、現在のところそれほど多く見出されてはいない。この種の材がどの程度の領域で彫像の用材とされ、またそこにどの程度、宗教的意味が込められたかは今後の重要な検討課題であろう。この問題については既に田鶴氏が検討を加えている⁽⁴⁾。（濱田）

近年、かつて出雲地方の神社に置かれていたと考えられている神像群が、世界各地の美術館や博物館に散逸して保管管理されていたことが判明し、継続した樹種調査を進めてきているが、その多くにモクレン属が含まれていることを突き止めている。なぜモクレン属が使われたのか、その解明に向けて学際研究を進めているところである。（田鶴）

3、放射性炭素による年代測定結果

株式会社パレオ・ラボに依頼し、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。以下の説明は、パレオ・ラボからの報告書の内容を一部抜粋しまとめさせていただいたものである。試料片は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5 SDH）を用いて測定し、得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。¹⁴C年代とは、AD1950年を基点にし、何年前かを示した年代を意味する。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違いを較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正には、OxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）が使用された。なお、以下に示した各像については、いずれも2 σ 暦年代範囲に着目した数値結果を掲載している。2 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する95.45%信頼限界の暦年代範囲である。個々のカッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

年代測定に供した試料については、最終形成年輪の含有の有無が不明である。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると、枯死もしくは伐採年代が得られるが、それよりも内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られ、これを古木効果という。今回の試料は、古木効果の影響を受けている可能性が考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代の可能性が考えられる。（田鶴）

浜田市・多陀寺 天部形立像その9（前稿図9）

890-980 cal AD (90.82%)

982-990 cal AD (4.63%)

奥出雲町・伊賀多氣神社 隨身立像（その1）（図1）

1280-1313 cal AD (52.13%)

1361-1388 cal AD (43.32%)

出雲市・鰐淵寺 僧形神立像（図6）

993-1033 cal AD (95.45%)

出雲市・鰐淵寺 男神立像（その2）（図12）

1056-1158 cal AD (81.59%)

1036-1055 cal AD (13.86%)

4、年代測定結果の考察

採取試料を利用した年代測定については、経費等の制約があったため上記の4軀のみについて行った。多陀寺像は、島根県の平安期木彫像のなかでも標準的な作風を示すことから選択した。他3像は素朴な表現と構造ゆえ、外観の観察だけでは制作年代を特に判断しがたいため選択したものである。

年代測定のための試料は、前掲の古木効果の影響を避けるためにはなるべく最終形成年輪に近い箇所、つまり材の外側から採取すべきである。しかしながら前稿で明示したとおり、今回の調査では文化財保護の立場から、像より既に剥離した復帰不能な小片のみを対象として試料採取をおこなったため、外側からの採取を徹底できていない。したがって像の制作年代を考えるにあたって、今回の測定値はあくまで上限を示す参考値としてしか扱い得ない。

そしてこのことは、木材の外縁から彫り進めて完成させる木彫像に対してこの種の年代測定をする際に、原理上ほとんどの場合で避けられない問題だろう。試料を採取しうる彫像の外縁が樹皮近くとは限らないうえに、材を伐採してから彫像として完成されるまでもに一定の時間が想定されるからだ。先行事例のなかには、この種の年代測定の結果をそのまま像の完成年代とする見解も散見されるが、そうした態度はおそらく適切ではない。像の制作年代を判断するにあたって、この種の年代測定結果は制作年代を想定する上限として参考にしつつ、様式上の見地や歴史的な経緯などから多角的に検討を加えるべきである。

さて以上の問題に留意しつつ、測定結果について若干の考察を加えておく。

多陀寺像は従来、外観の観察から10世紀の作と考えられており、このたびの測定値もそれに沿う結果が出た。鰐淵寺男神立像（その2）は平安後期が制作年代の上限とみられるものの特異な作風ゆえ判断し難かった作例だが⁽⁵⁾、このたびの測定結果は平安後期・11世紀後半から12世紀半ばの年代値であり、やはりこの頃を制作年代の上限と考えることができる。同寺僧形神立像についてはこれより100年程度遡る10世紀末から11世紀前半の値が出たものの、霊場としての鰐淵山が記録上にはっきり現れるのは12世紀以降であり（仁平3年〔1153〕銘石製経筒ほか）、それ以前から神像が盛んに造像されていたとは考えにくい。先述の古木効果の影響が大きく出ている可能性も考えられ、今回の結果は繰り返して述べるように、あくまで制作年代の上限とみるにとどめたい。

このたびもっとも注意したいのは伊賀多氣神社像の結果である。これまで本稿筆者（濱田）は、一木造りで内削りのない古様の構造と、鎌倉彫刻に通ずる迫真性が垣間見える表情とを勘案し、本像の制作年代を平安後期・12世紀と考えていた⁽⁶⁾。しかしながら今回の測定結果は13世紀末から14世紀の可能性が高いことを示している。先述のとおり測定年代が像の実際の制作年代より古く出る可能性はあっても、その逆は考えにくく、今回の結果からは13世紀末が本像の制作年代の上限と考えざるを得ない。この結果をふまえ、本像の制作年代については鎌

倉・南北朝時代作の可能性を中心に再検討する必要性が生じたといえよう。(濱田)

鰐淵寺の僧形神立像はモクレン属と同定した。放射性炭素年代測定により10世紀末から11世紀前半の値が出たものの、濱田氏が上記されたとおり霊場としての鰐淵山が記録上にはっきり現れるのは12世紀以降であることを考えると先述の古木効果の影響が大きく出ている可能性も考えられる。ただし、現在継続して調査を進めている世界の美術館や博物館に散逸したとされるモクレン属の出雲地方の神像群の一部には、僧形神立像同様に、10世紀から11世紀という値が得られたものも含まれており、もちろん古木効果は視野にいれる必要があるが、重要な知見が得られたと考えている。今後も慎重にモクレン属の造像の背景を含めた研究の深化に努める所存である。(田鶴・杉山)

おわりに

以上2回にわたって、このたびの樹種識別調査結果の報告をおこなった。平安期の用材選択の一般的な傾向を島根の小像に至るまで追認できることや、特殊な用材選択も場合によっては認められること、神像の用材選択は出雲においても基本的に仏像に準ずることなど、数々の重要な知見を得ることができた。今後はこれらの知見を頼りにして各作例に改めて向き合い、当地の彫刻史の再考につとめたい。

地方において彫刻史を専門とする研究者は他分野に比べて多いとはいえ、ゆえに地域によって研究の進展にはかなりの偏りがある。加えて、このたびのように木材解剖学の知見に触れる機会を得ることは、地方においてはかなり難しい。しかしながら日本彫刻史を総合的に理解するためには、各地方の研究水準をくまなく向上させることが不可欠なのであり、そのためにも、こうした調査が特定の範囲にとどまらず拡がりをみせていくことが望まれよう。

古代出雲歴史博物館のような地方公立館においては、もとより上記のような困難を伴う調査であったが、それを可能にしたのは第一に、島根において先例に乏しい調査であるにもかかわらず快く受け容れて頂いた、各彫像所蔵者の寛大な御理解であった。加えて、異なる立場でありながら地域における文化財保護の意義をふまえ、両者にとって妥当な方法を探りつつ調査を実施され、その結果を早期に当地へ還元してくれた、田鶴氏をはじめとする京都大学生存圏研究所各位の御理解も欠かせないものであった。本調査に御協力頂いた皆様に心より感謝申し上げます。(濱田)

樹種同定という作業は、文化財にかぎらず非常に重責を伴う作業であり、また試料の劣化やサイズにより同定が非常に困難なケースもあり、難儀することも多い地道な作業である。顕微鏡をのぞきながら自らの未熟さを痛感するとともに、今回のように複数の研究者の目で確認作業を繰り返すことの大事さを今まで以上に強く感じている次第である。いろいろな意味で課題は残っているものの、樹種調査というものは、日本人と木との関係を見出すうえで大きな意味を持つことは明らかであり、広い視野でデータを見つめることで、古代の用材選択の傾向や意味、信仰をつまびらかにする可能性を大いに秘めている。

前稿にて濱田氏が書かれた「用材の識別は、彫刻史の立場から言えば彫像と向き合うための第一歩に過ぎない。識別結果を、造像当時の信仰・植生・社会情勢などと照らし合わせ、造像にいたる経過や心性を復元的に検討することこそが重要である」という結びの言葉は、このような研究を進めていくうえでの最も重要な視座であると考えている。島根県での木彫像調査をきっかけに継続してモクレン属の彫像とその文化的背景を研究しているが、人々と木との間に流れる奥深い関係性、心性にフォーカスする研究も、木材解剖学の研究と同時に進めていきたいと思っている。未熟な研究者である私に、このような貴重な機会をくださった濱田氏、所蔵者各位、関係者の皆様、ならびに調査においてご助言くださった皆様に、深くお礼申し上げる次第である。(田鶴)

註

- （1）同様の傾向は、仏像・神像の樹種調査をより広汎に実施した岩佐光晴氏らの研究チームによって既に指摘されている。研究代表者岩佐光晴『東アジアにおける木彫像の樹種と用材観に関する調査研究』（平成30年度～令和3年度 科学研究費補助金 基盤研究（B）研究成果報告書、2022年）、85頁。このたびの調査結果はこれを島根においても追認できることを意味する。
- （2）前稿101頁註9など参照。
- （3）井上正「霊木化現仏への道」（『芸術新潮』第42巻第1号〔1991年1月号〕、1991年）、山下立「神の相貌に現れた瘡―神木に影向する神―」（『滋賀県立安土城考古博物館紀要』第24号、2017年）など。なお、節が木彫像の霊性を担保するとしても、それが必ずしも霊木信仰を反映するとは限らないことについては、かつて次の拙稿で論じた。濱田恒志「広島・善根寺収蔵庫の木造僧形坐像をめぐる一用材の節と善珠の面影―」（肥田路美編『古代文学と隣接諸学 6 古代寺院の芸術世界』竹林舎、2019年）。
- （4）田鶴寿弥子「欧米に散逸した神像群をめぐる木材解剖学×美術史学の国際的な学際研究」（『生存圏研究』18号、2022年）。
- （5）後掲参考文献『島根の神像彫刻』76頁。
- （6）後掲参考文献『島根の神像彫刻』80頁。

調査作例の参考文献

島根県立古代出雲歴史博物館編『島根の仏像―平安時代のほとけ・人・祈り―』図録（同館、2017年）
島根県立古代出雲歴史博物館編『島根の神像彫刻』（同館、2018年）
濱田恒志・中司健一「益田市・櫛代賀姫神社の神像について」（『古代文化研究』第31号、2023年）

図版の出版

作品写真は古代出雲歴史博物館の所蔵、顕微鏡写真は京都大学生存圏研究所にて撮影したものである。

付記

本調査の実施と結果の公表については、各尊像の所蔵者各位より寛大なる御理解を賜りました。樹種調査においては、京都大学名誉教授伊東隆夫先生、京都大学生存圏研究所技術専門職員反町始氏よりご助言を賜りました。この場をお借りしてお礼申し上げます。なお、本研究は、科研費C（19K01124）、京都大学人と社会の未来研究院令和4年度人文社会科学・文理融合的研究プロジェクト、京都大学生存圏研究所未来開拓研究センター、生存圏データベース（材鑑調査室）共同利用・共同研究の助成を受けましたことをここに明記します。

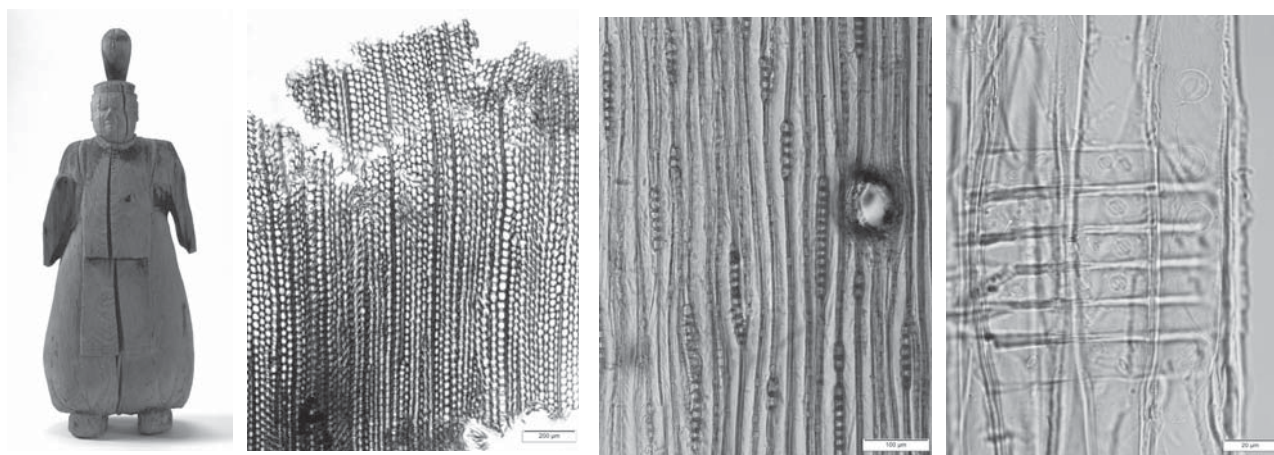


図1 隨身立像(その1) 奥出雲町・伊賀多氣神社
左から本体正面、採取試料の顕微鏡写真(以下同順に掲載)左:木口面 中:板目面 右:柁目面

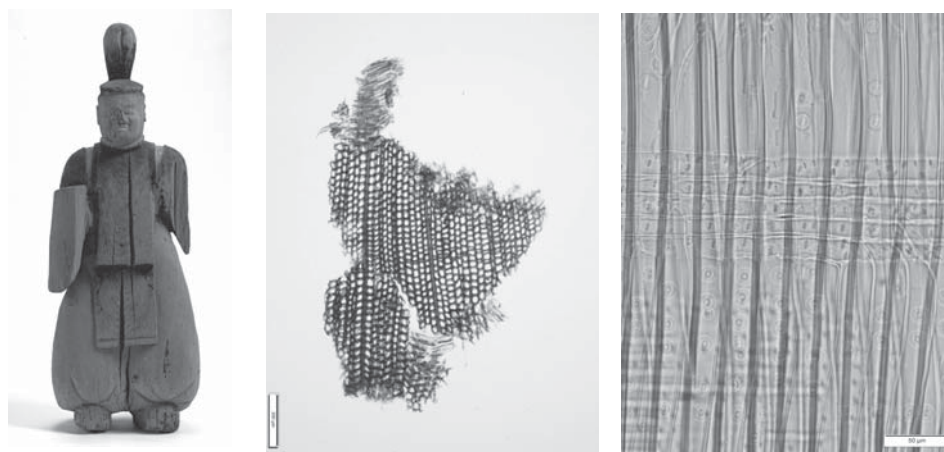


図2 隨身立像(その2) 奥出雲町・伊賀多氣神社
(顕微鏡写真 左:木口面、右:柁目面)

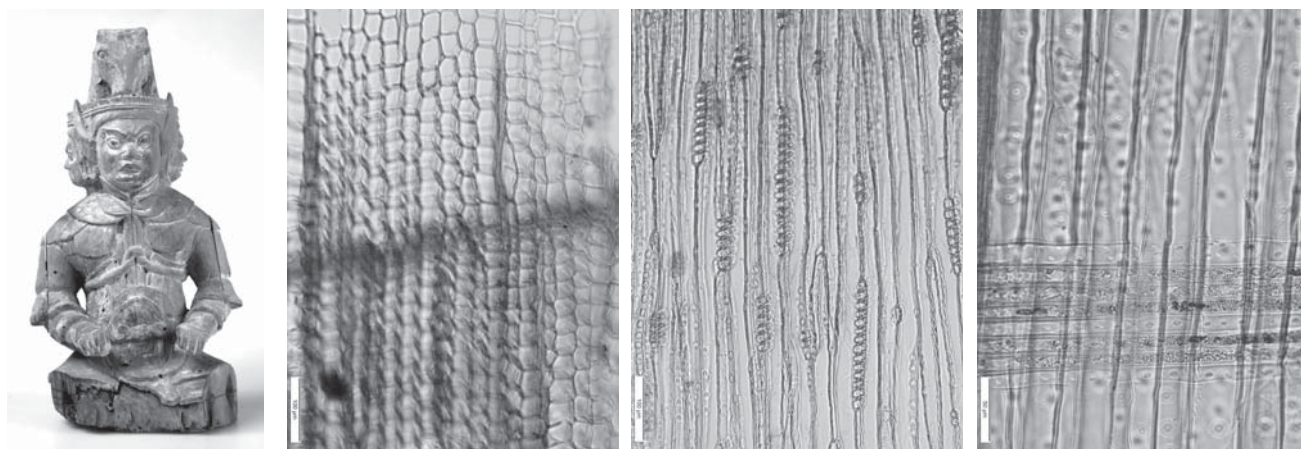


図3 牛頭天王坐像(その1) 出雲市・鰐淵寺(顕微鏡写真 左:木口面 中:板目面 右:柁目面)

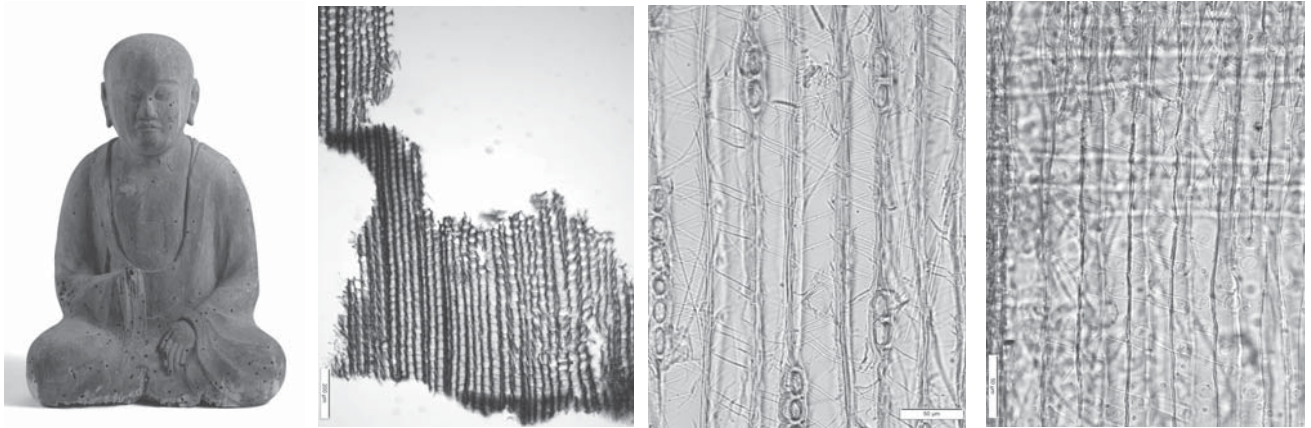


図4 僧形神坐像 出雲市・鰐淵寺(顕微鏡写真 左:木口面 中:板目面 右:柃目面)



図5 女神坐像 出雲市・鰐淵寺(顕微鏡写真 柃目面)

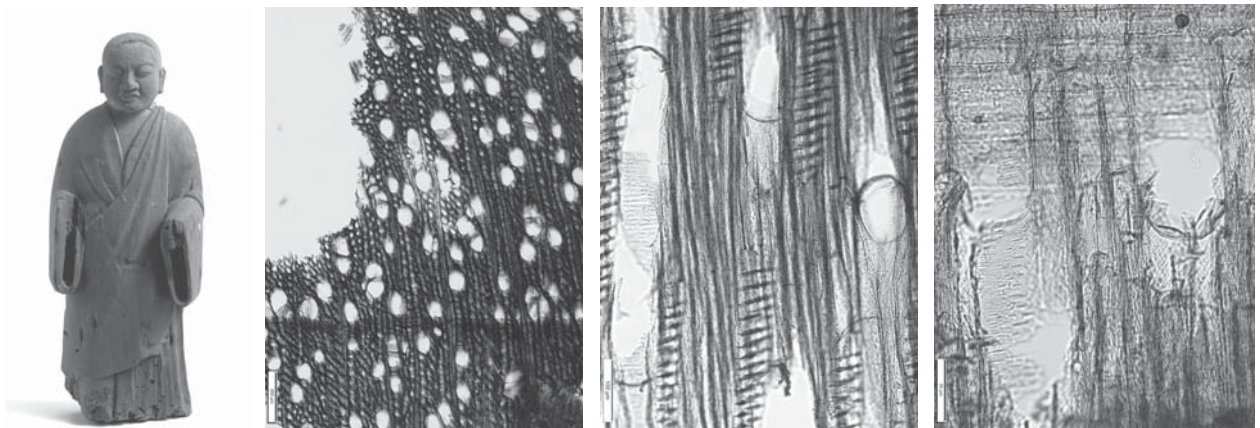


図6 僧形神立像 出雲市・鰐淵寺(顕微鏡写真 左:木口面 中:板目面 右:柃目面)

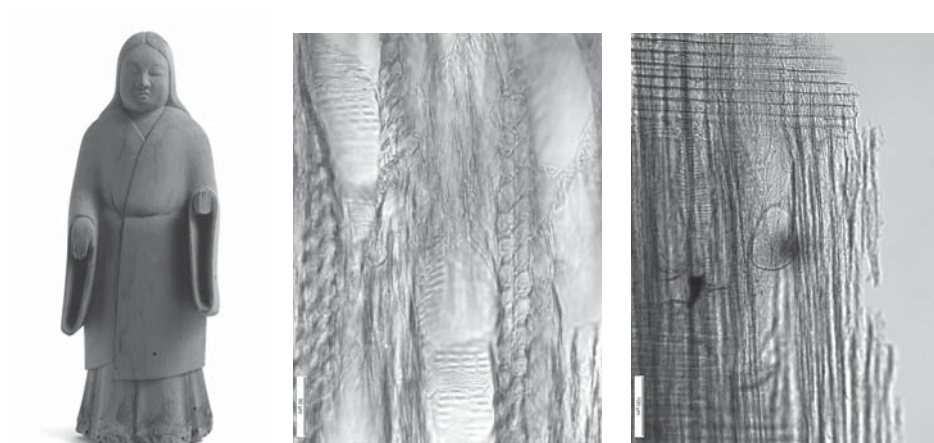


図7 女神立像 出雲市・鰐淵寺(顕微鏡写真 左:板目面 右:柃目面)

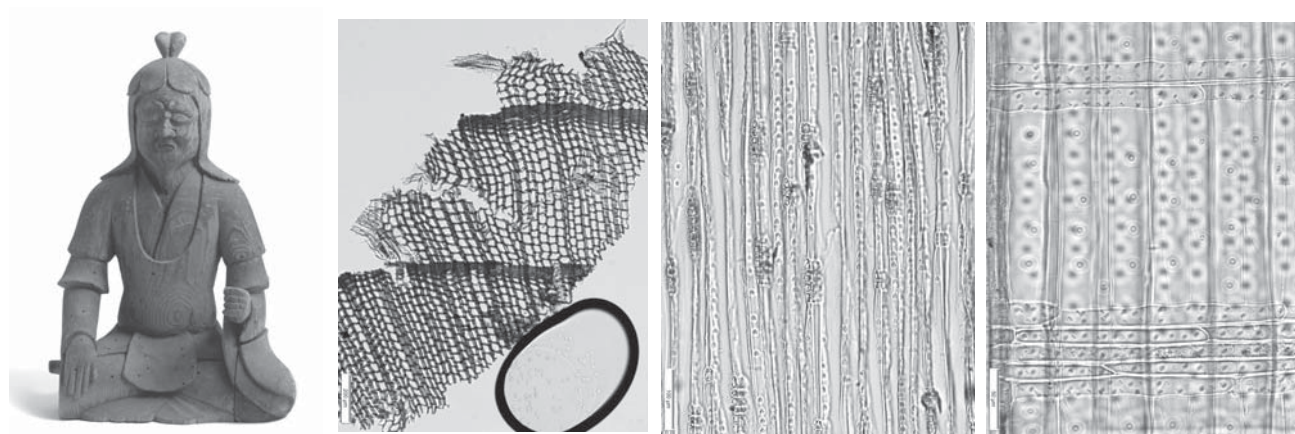


図8 男神坐像(その1) 出雲市・鰐淵寺(顕微鏡写真 左:木口面 中:板目面 右:柃目面)

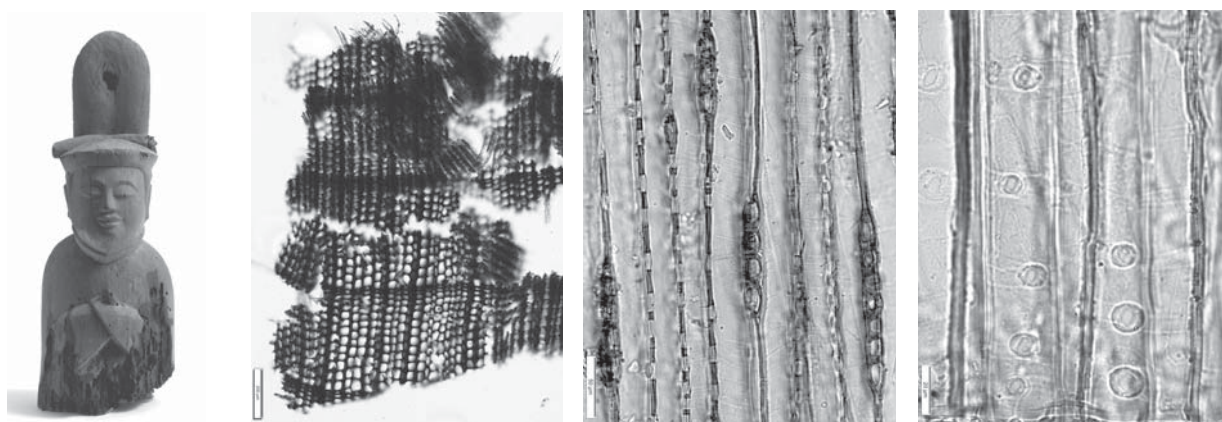


図9 男神坐像(その2) 出雲市・鰐淵寺(顕微鏡写真 左:木口面 中:板目面 右:柃目面)

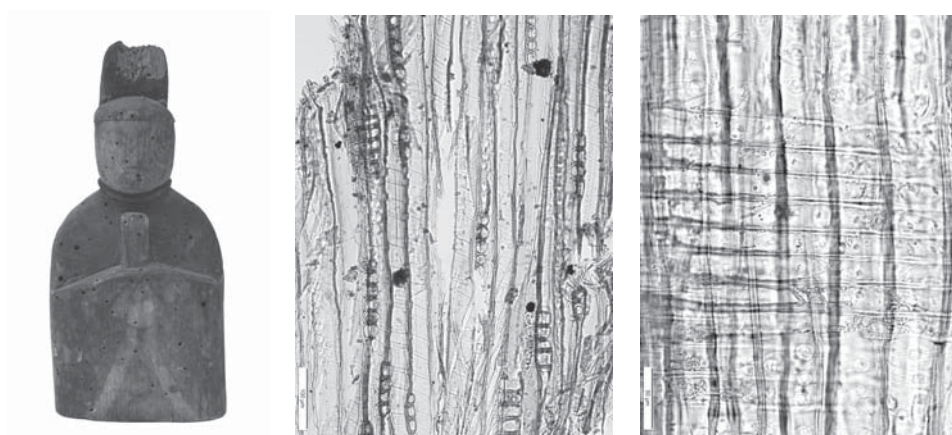


図10 男神坐像(その3) 出雲市・鰐淵寺(顕微鏡写真 左:板目面 右:柁目面)

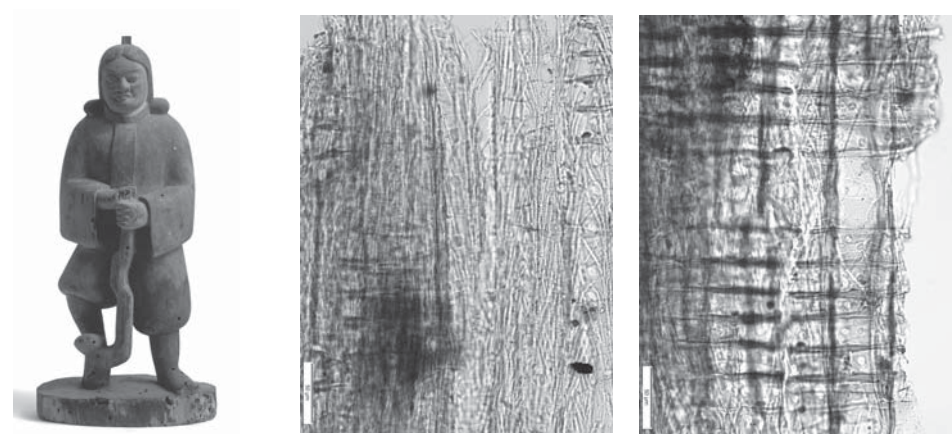


図11 男神立像(その1) 出雲市・鰐淵寺(顕微鏡写真 左:板目面(斜め) 右:柁目面)

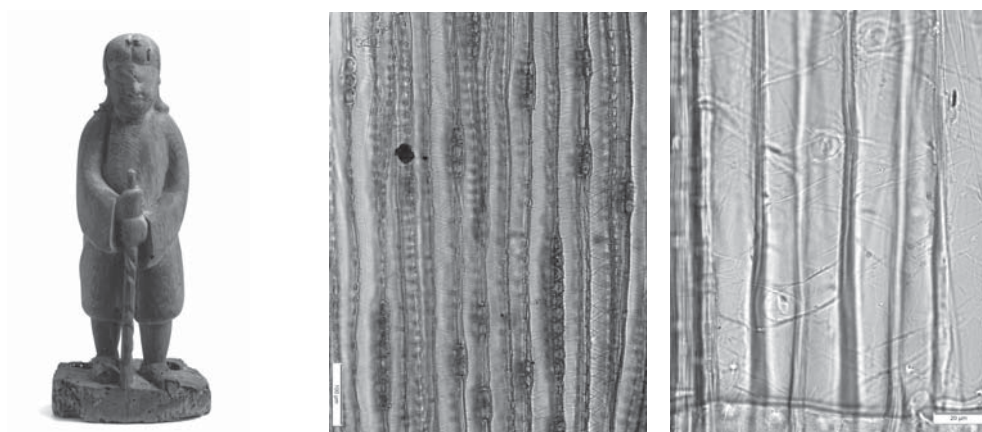


図12 男神立像(その2) 出雲市・鰐淵寺(顕微鏡写真 左:像底・板目面 右:左肩後ろ・柁目面)

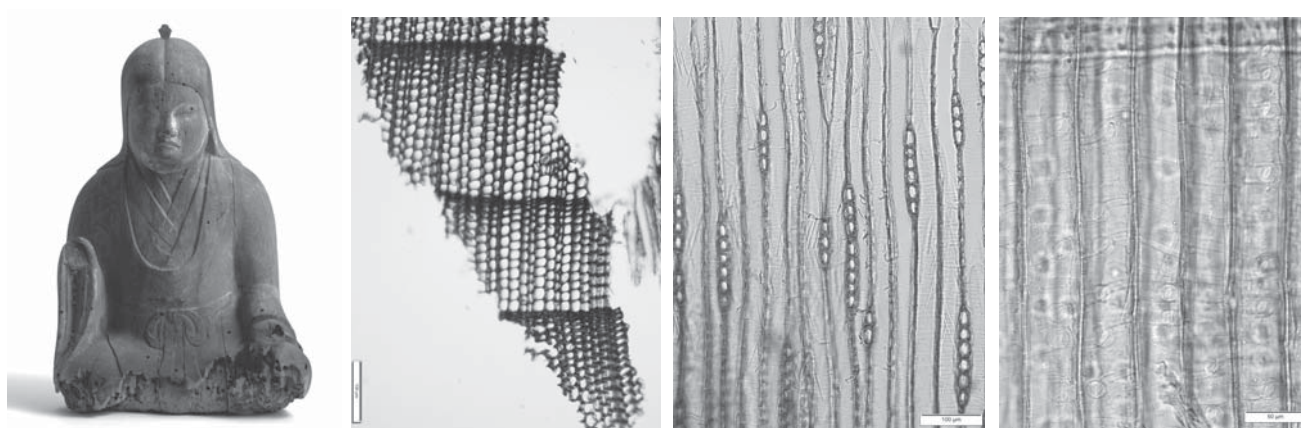


図13 女神坐像 出雲市・鰐淵寺(顕微鏡写真 左:左膝・木口面 中:右膝・板目面 右:左膝・柃目面)

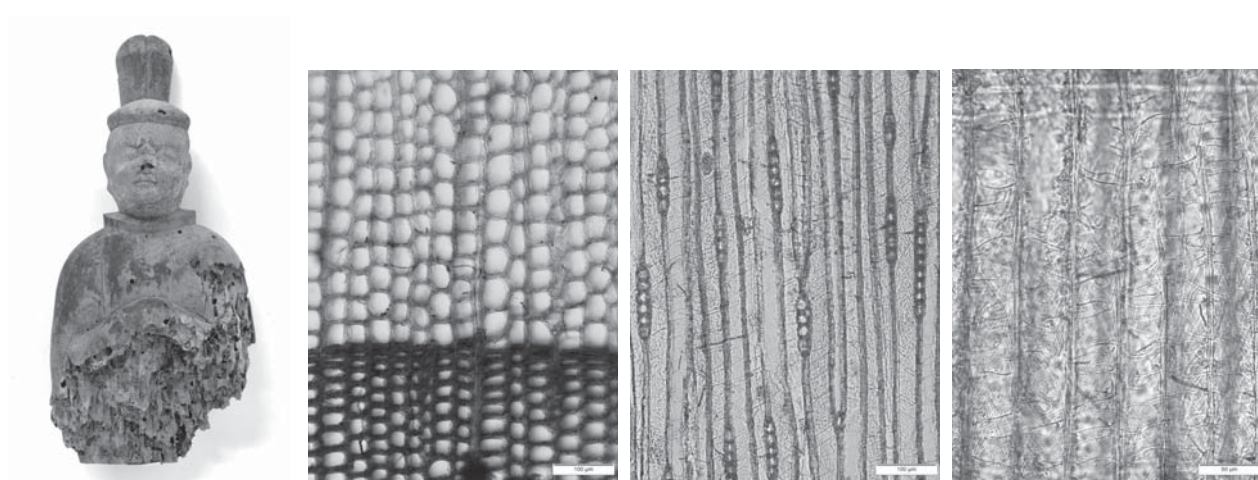


図14 男神坐像 出雲市・鰐淵寺(顕微鏡写真 左:木口面 中:板目面 右:柃目面)



図15 僧形神坐像 出雲市・鰐淵寺(顕微鏡写真 板目面)

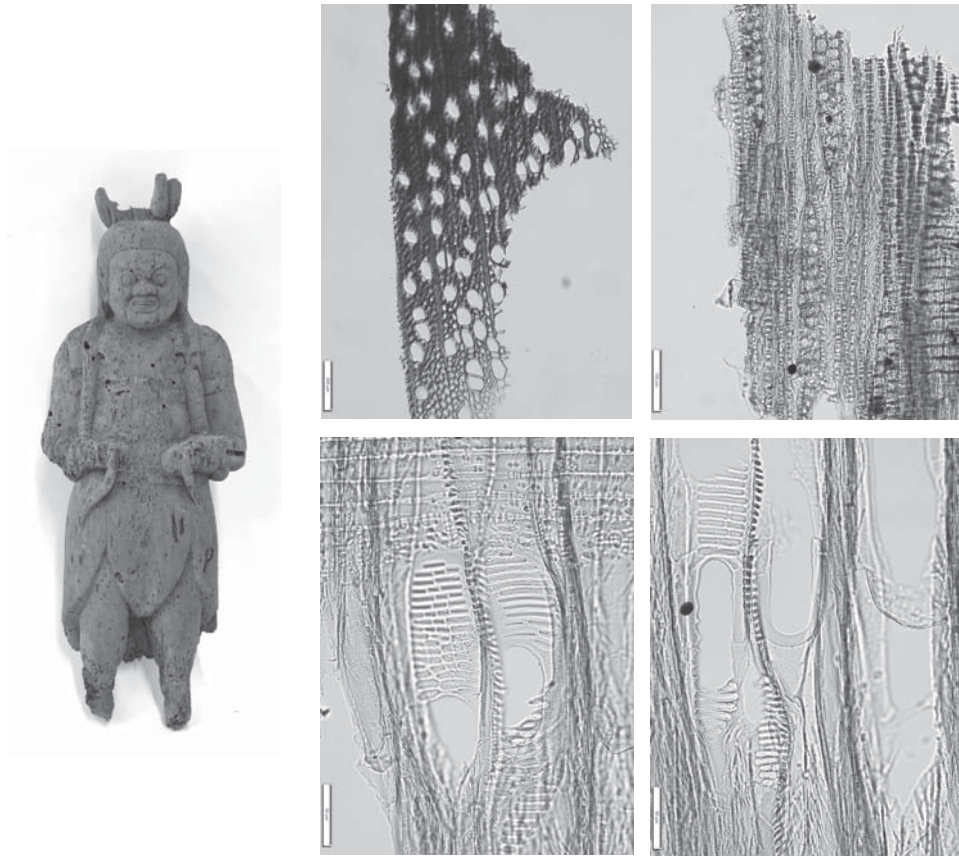


図16 天部形立像 出雲市・鰐淵寺(顕微鏡写真 上段左:木口面 上段右:板目面 下段左右とも:柱目面)

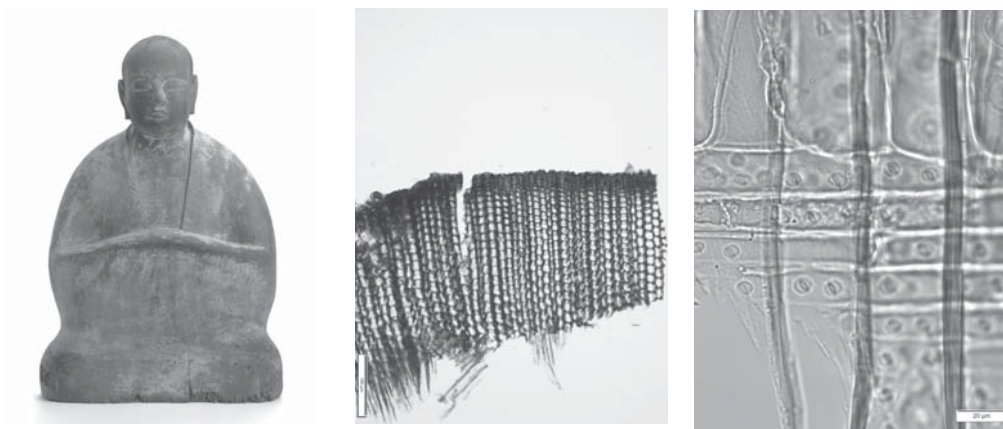


図17 僧形神坐像 益田市・櫛代賀姫神社(顕微鏡写真 左:木口面 右:柱目面)

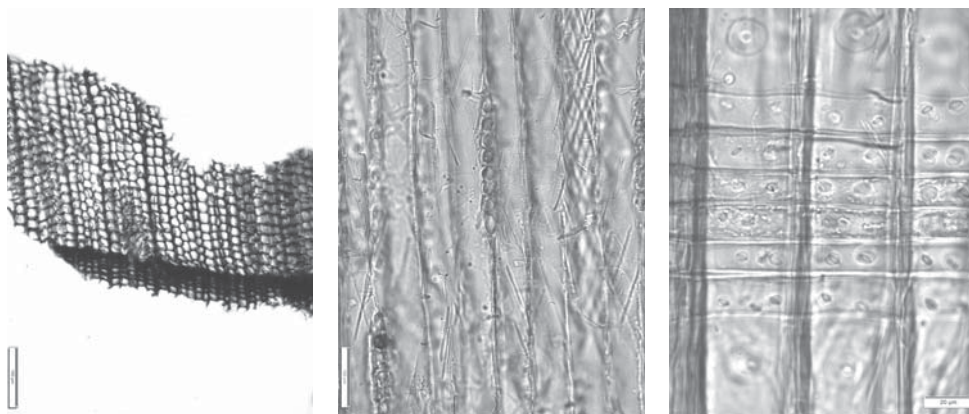


図18 男神坐像(その2) 益田市・櫛代賀姫神社(顕微鏡写真 左:木口面 中:板目面 右:柱目面)

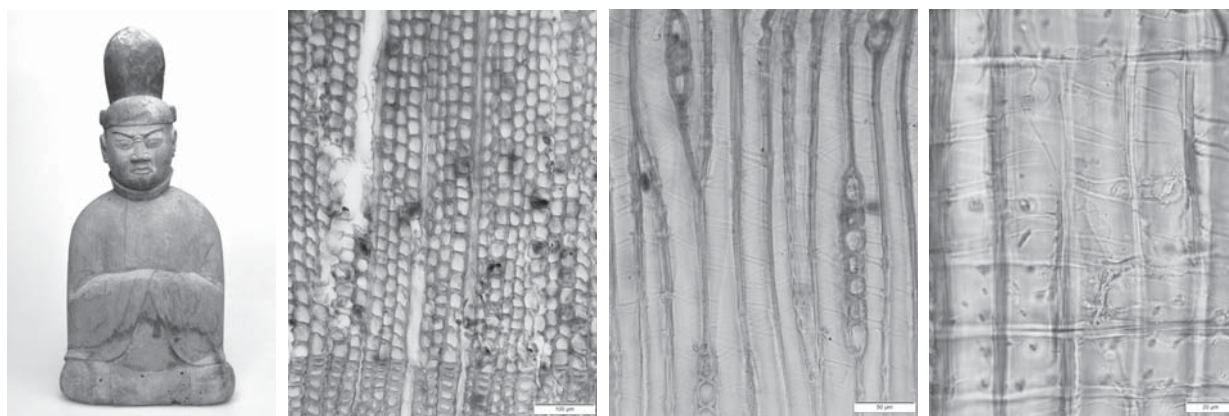


図19 神像群のうちその1 男神坐像 出雲文化伝承館(顕微鏡写真 左:木口面 中:板目面 左:杵目面)



図20 神像群のうちその3 男神坐像 出雲文化伝承館
(顕微鏡写真 杵目面)



図21 神像群のうちその77 男神坐像 出雲文化伝承館
(顕微鏡写真 杵目面)

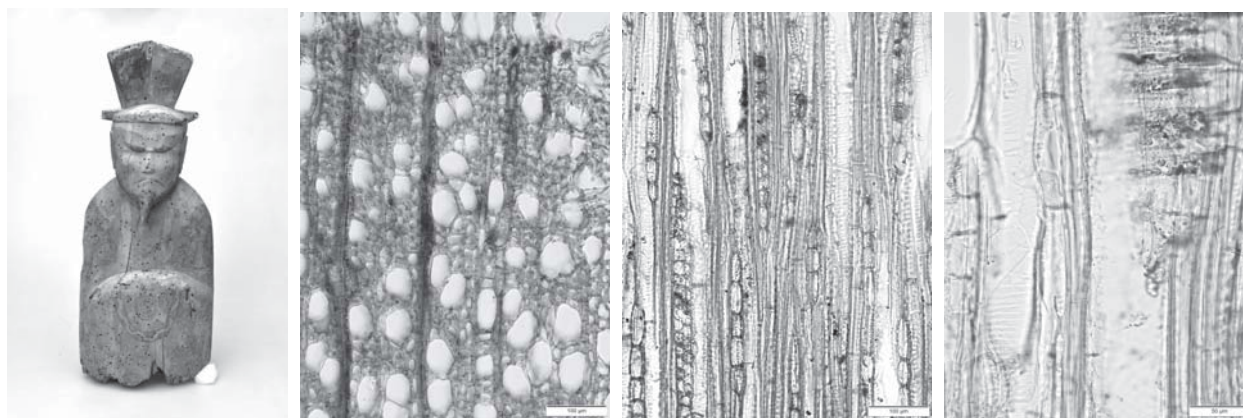


図22 神像群のうちその139 男神坐像 出雲文化伝承館(顕微鏡写真 左:木口面 中:板目面 左:杵目面)

表 1 同定結果

図番号	所蔵者	尊名	放射性炭素年代測定	結果	従来推定の制作年代 (参考文献による)	同定結果	試料採取部位	像高(cm)	構造の概要	指定	参考文献での作品番号
1	奥出雲町・伊賀多氣神社	隨身立像（その1）	1280-1313 cal AD (52.13%) 1361-1388 cal AD (43.32 %)		平安時代・12世紀	ヒノキ	左足かかと	112.9	一木造り。現状の全容を一材で彫成。内 刳りなし。	県指定	『神像』 8
2	奥出雲町・伊賀多氣神社	隨身立像（その2）			平安時代・12世紀	ヒノキ	正面干割れ	110.4	一木造り。現状の全容を一材で彫成。内 刳りなし。	県指定	『神像』 8
3	出雲市・鰐淵寺	牛頭天王坐像(その1)			平安時代・12世紀	ヒノキあるいはアスナロ属	正面右足	37.2	一木造り。頭体幹部一材製。内刳りなし。 画1圖外側刳り材削ぎ。	県指定	『神像』 4.1
4	出雲市・鰐淵寺	僧形神坐像			平安時代・12世紀	カヤ	像底	45.0	一木造り。頭体幹部一材製。内刳りなし。 正面中央に方形埋木。	県指定	『神像』 4.2
5	出雲市・鰐淵寺	女神坐像			平安時代・12世紀	カヤ	正面手先	49.4	一木造り。頭体幹部一材製。内刳りなし。 正面中央に方形埋木。	県指定	『神像』 4.2
6	出雲市・鰐淵寺	僧形神立像	993-1033 cal AD (95.45%)		平安～鎌倉時代・12～13世紀	モクレン属	像底	37.1	一木造り。頭体幹部一材製。内刳りなし。 背面中央に円形埋木。	県指定	『神像』 4.3
7	出雲市・鰐淵寺	女神立像			平安～鎌倉時代・12～13世紀	モクレン属	像底	37.5	一木造り。頭体幹部一材製。内刳りなし。 背面中央に円形埋木。	県指定	『神像』 4.3
8	出雲市・鰐淵寺	男神坐像（その1）			平安時代・12世紀	ヒノキあるいはアスナロ属	左膝材のほぞ穴の中	38.5	一木造り。頭体幹部一材製。内刳りなし。 左右膝・背板別材。	県指定	『神像』 4.4
9	出雲市・鰐淵寺	男神坐像（その2）			平安時代・12世紀	カヤ	冠左側面	40.2	一木造り。現状の全容を一材で彫成。内 刳りなし。冠正面に面。	県指定	『神像』 4.4
10	出雲市・鰐淵寺	男神坐像（その3）			平安時代・12世紀	カヤ	冠正面	23.0	一木造り。現状の全容を一材で彫成。内 刳りなし。	県指定	『神像』 4.4
11	出雲市・鰐淵寺	男神立像（その1）			平安時代・12世紀	カヤ	台座正面左（台座も本体と 実木）	37.8	一木造り。頭体幹部一材製（台座・持物 含む）。内刳りなし。背面中央に円形埋木。	県指定	『神像』 4.5
12	出雲市・鰐淵寺	男神立像（その2）	1056-1158 cal AD (81.59%) 1036-1055 cal AD (13.86%)		平安時代・12世紀(室町時代 頃まで降る可能性あり)	カヤ	像底、左肩後ろ	47.4	一木造り。現状の全容を一材で彫成。内 刳りなし。	県指定	『神像』 4.5
13	出雲市・鰐淵寺	女神坐像			平安～鎌倉時代・12～13世紀	カヤ	左膝、右膝	34.5	一木造り。現状の全容を一材で彫成。内 刳りなし。	県指定	『神像』 4.6
14	出雲市・鰐淵寺	男神坐像			鎌倉時代・13世紀	カヤ	正面前下半身朽損部	31.5	一木造り。現状の全容を一材で彫成。内 刳りなし。		『神像』 5
15	出雲市・鰐淵寺	僧形神坐像			平安時代・12世紀	カヤ	下半身朽損部	26.4	一木造り。現状の全容を一材で彫成、内 刳りなし。面部に面。		『神像』 6
16	出雲市・鰐淵寺	天部形立像			平安～鎌倉時代・12～13世紀	モクレン属	左手先	40.7	一木造り。頭体幹部一材製。内刳りなし。 背面中央に円形埋木。		『神像』 7
17	益田市・櫛代賀姫神社	僧形神坐像			平安時代・11～12世紀	ヒノキ	像底左端	63.5	一木造り。現状の全容を一材で彫成、内 刳りなし。	市指定	『神像』 3・「櫛」
18	益田市・櫛代賀姫神社	男神坐像（その2）			平安時代・11～12世紀	ヒノキ	像底からの剥落片	66.9	一木造り。現状の全容を一材で彫成、内 刳りなし。		「櫛」
19	出雲文化伝承館	その1 男神坐像			平安時代・12世紀	カヤ	像底	44.4	一木造り。現状の全容を一材で彫成、内 刳りなし。		『神像』 10
20	出雲文化伝承館	その3 男神坐像			平安時代・12世紀	ヒノキ	像底	32.1	一木造り。現状の全容を一材で彫成、内 刳りなし。		『神像』 10
21	出雲文化伝承館	その77 男神坐像			平安時代・12世紀	カヤ	剥落片、背面	34.8	一木造り。現状の全容を一材で彫成、内 刳りなし。破損著しい。		『神像』 10
22	出雲文化伝承館	その139 男神坐像			室町～江戸時代?	カツラ	剥落片	50.2	一木造り。現状の全容を一材で彫成、内 刳りなし。		『神像』 10

※参考文献の略称 『神像』：『島根の神像彫刻』 「櫛」：『益田市・櫛代賀姫神社の神像について』

表 2 樹種集計

	伊賀多氣神社	鰐淵寺（県指定）	鰐淵寺（未指定）	櫛代賀姫神社	出雲文化伝承館	合計
カヤ		7	2		2	11
ヒノキ	2			2	1	5
ヒノキあるいはアスナロ属		2				2
モクレン属		2	1			3
カツラ					1	1
						総計22